

『ユートピア』と大航海時代

辻 田 右 左 男*

Sir Thomas More's 'The Utopia' and the Age of Great Voyages

Usao TSUJITA

(1978年9月28日受理)

は し が き

ユートピアと言え、現在では空想上の楽園、理想境などを意味する一般用語となっているが、ここでは16世紀の初めに刊行され、すべてのユートピア思想の源流になっているトマス＝モアの『ユートピア』¹⁾をさしている。これは460年前に書かれた書物であるが、あるべき国家・社会の青写真を提示し、予見したという意味で現在でも新鮮さを感じさせる。

それゆえ、モアの時代から今日に至るまで『ユートピア』の研究書・論文は枚挙にいとまないほど多く、またユートピアを地上に実現しようとするもろもろの社会運動も跡を絶たない²⁾。さらに『ユートピア』と同類型の思想を時代を超えて模索し、それらを思想史の上から研究した著書も多い³⁾。最近、わが国でもモアならびに『ユートピア』を社会思想の上から見た力作が数編出ている⁴⁾。

筆者はいまさら改めて、『ユートピア』を思想史や英文学史の側面から見ようとは思わない。すでにイギリスの地理学史家 J.N.L. ペイカーもその論文のなかで注意している⁵⁾ように、想像の産物以外のなものでもない、いわゆるユートピアや桃源境・蓬萊国など架空の国土も、実は例外なく地理的事物を背景として想定されている。古代におけるプラトンの『共和国』に始まり、アウグスティヌスの『神の都』、カンパネラの『太陽の都』(1623)、フランシス＝ベーコンの『ニューアトランティス』(1627)などのユートピア思想がいずれも地理的用語で表現されているのをみてもその一端が察せられる。砂漠民族のユートピアともいふべきパラダイスは、かれらの住地の地理的環境と対照的な緑したたる、みずみずしいオアシスのイメージと切り離せない。

このようにユートピア思想を地理学の立場から見ていくことは、筆者年来の宿願であったが、世上無数にあるユートピアのひとつひとつを地理的に考察することは筆者の能力の限界をはるかに越えている。

たまたま、トマス＝モアの『ユートピア』を取り上げてみると、この書物の背景として、アメリカ大陸の名称の由来するアメリゴ＝ヴェスプッチの名前が現われ、しかもアメリゴの航海に4度も参加したというラファエル＝ヒスロディの旅行体験の一環として、ユートピア島が語られている。そこで、せめてこれだけでも、地理学の視角からながめてみようと思ひ立った。

* 地理学研究室

書物が時代の影響を受けることは当然であるが、時あたかも大航海時代（従来の地理的発見時代）のさなかに公にされた『ユートピア』も多分にこの時代の風潮、とくにその地理的知見を反映しているのではないかと考えてみた。そして結論的には、大航海時代がヨーロッパの地理学、地図学に画期的な進歩をもたらしたことを容認すると同時にモアの『ユートピア』もまた大航海時代の1つの産物とみなしたいのである。

1. トマス＝モアの生涯

イギリスルネサンスを代表する人文学者トマス＝モア Sir Thomas More は、いまよりまさしく500年前、1477年⁶⁾ ロンドンの高名な法律家 John More の長男として生れた。13歳のとき、シェイクスピアの『リチャード3世』に実名で出てくるカンタベリー大司教モートン Morton の小姓 page となった。少年が名家に寄宿して教育を受けるのは、



第1図 トマス＝モア像

中世騎士制度のしきたりであったが、モアの父もそれを真似たのであろう。15歳のとき Oxford 大学に入学したが2年間で中退し、父の意志にそって法律を学び始めた。数年にしてその道の expert となったが、かたわらギリシア古典の研究においても頭角を現わし、古典学者の集いで、アウグスティヌスの『神の都』Civitas Dei の連続講義を試みたこともある。

1499年、モア22歳のとき、前年からイギリスを訪問中の、北歐ルネサンスの巨匠 D. エラスムス Erasmus⁷⁾ と出会い、エラスムスはモアの12歳年長であったが、ふたりは生涯肝胆相照らす仲となった。天才と呼ばれたモアの学識と温和で、快活なかれのひととなり⁸⁾ は、かれの父、姻戚の栄達を背景として

とどまるところはなかった。1504年下院議員、治安判事をはじめとし、上院議長、財務副長官、対仏講和条約締結委員などイギリス政府の要職につき、1529年には法曹界の最高位大法官 Lord Chancellor に就任、1521年すでに Knight, Sir の称号も授けられていた。ヘンリ8世の信任もあつく、あらゆる問題について、国王の側近顧問官 Council の位置にあった。

しかしヘンリ8世の離婚問題が起り、このためヘンリがローマ教皇から離脱して新しいキリスト教の宗派（イングランド教会）を樹立しようという強行策に、熱心なカトリック信者⁹⁾ であったモアは、身の危険をかえりみず猛然と反対した。国王至上権確定法の序文に署名を拒んだ¹⁰⁾ ことにより、ついに破局を迎え、いっさいの公職追放、所領没収の上、ロンドン塔に送られた。幽閉1年3か月、1535年7月塔内 Tower Hill の刑場で首を斬られた。57歳という人生の円熟期であった。

親友エラスムスはモアの刑死を聞いて、憂悶にとざされ、イギリスからバーゼルに逃れて、翌年そこでモアの後を追うように客死している。エラスムスはモアを識ってから、イギリスに渡ると共に、モアの邸に滞在し、学問を論じ、モアとギリシア古典 Lucian の共訳をしたこともある。1508年モア邸で『痴愚神礼讃』¹¹⁾ を執筆し「ロッテルダムのエラ

スムスよりその親しき友トマス＝モアに捧ぐ」という献辞を記入した。

逆に、モアがヘンリ 8 世の外交使節としてフランドルを訪れたとき、エラスムスはかれをアントワープに出迎え、その協力で1516年モアの『ユートピア』が公刊された。いわばこの2つの書物は、かれらの友情の上に花咲いた2輪の名花であった。「さすらいの学人」the Wandering Scholar と呼ばれ、世界市民の名にふさわしいエラスムスはヨーロッパ各国を遍歴し、各地の政治・経済・文化の状況報告を惜しみなくモアに提供した。ことに晩年『プレトマイオスの地理書』をギリシア語写本にもとづいて出版（1533年、バーゼル）¹²⁾したぐらいであるから、エラスムスは他の人文科学とともに地理学にも興味をもち、この影響がモアにも及んだと考えられる。

16世紀の最初の10年間、モアはまだ20代の青年であったが、かれは当時のイギリスの知的社会で最も有力 leading であったといわれる人文学者の研究グループを組織し¹³⁾、宗教思想を主として研究するかわら、地理学、とくに新世界の地理的知識の獲得に情熱を燃やした。

エラスムスを媒介としてヨーロッパ大陸の若い学者とも気脈を通じ、活発な研究活動を行なった。エラスムスにとってはこの研究会によって拡大していく世界を知ることが、キリスト教布教領域の拡大に結びつくという目算があったし、モアにとってはアメリゴ＝ヴェスプッチが南米東岸を南進し、そのいやはてにたどりついた Cape Frio（寒冷岬）をかれの脳裡にあったユートピアへの通路、架空と現実の岐路として受けとめられたであろう¹⁴⁾。

この研究グループによって得た地理や航海の知識が役立ち、モアが1515年、冒険商人 Merchant Adventurers のスポークスマンとして、アントワープのハンザ商人と会談する¹⁵⁾イギリスの外交使節にえらばれたのではないかという推測もできる。

モアが地理を好み、旅行に興味をもっていたことは、『ユートピア』の主人公ヒスロディの性格描写を通じてもうかがわれる。ヒスロディに「世界の隅々を見たい」「旅行さえできたら死ぬことなんか何とも思っていない」¹⁶⁾など言わしめているのは、モア自身の自画像と受けとれる。後年の『ロビンソン＝クルーソーの冒険』の hero ロビンソンが、著者ダニエル＝デフォーの分身であることはよく知られている¹⁷⁾が、謹直なモアの性質のなかに、デフォーにみるような放浪癖が秘められていたかも知れない。

モアのこの地理熱心、とくに新世界への憧憬はかれの親類・縁者にも感染し、かれの義弟 John Rastell¹⁸⁾ は、『ユートピア』刊行の翌年、単身アメリカ大陸に渡航、帰国後、貴重な地理書を何冊¹⁹⁾か書いている。

しかし現実の問題として、このころからモアは宮廷人として、身辺俄かに多忙をきわめるようになり、旅行もままならず、念願のイタリア²⁰⁾の土は一度も踏むことはできず、みずからが創造したユートピアのなかで旅行を楽しむほかはなかった。

2. 『ユートピア』の成立と構成

『ユートピア』は前述のように、1515年モアがアントワープ滞在中に起草された。当時アントワープは北欧の貿易都市として繁栄し、すでに10万の人口をもつ国際的文化中心であった。モアの故郷である霧の深い、ごみごみしたロンドンとは異なり、町並は瀟洒で美しく、婦人たちの多くは3、4か国語を自由に操ることができた。このように高い文化的雰囲気をもつアントワープは、青年期をわずかに過ぎたばかりの若いモアを魅了したに違いない。たしかにアントワープは「モアにとりユートピアに一步近い存在であったやも知



第2図 ユートピア島の見取図 (1518年版)

アップの知識人に訴えるという意図から、モアの母国語でなく、ラテン語で記された『ユートピア』の英語訳が Ralph Robynson の手でなされた²²⁾のは、モアの死後16年を経た1551年であって、はじめて英語訳を見たイギリスの民衆は、『ユートピア』のはげしい語調に驚きを禁じえなかったであろう。

モアが『ユートピア』をラテン語で書き、またあくまで非現実の物語であることを印象づけるため、ギリシア語の知識を活用して、さまざまな地名・人名を作り出したのは、多くのきびしい批判にも耐えられるという計算された自衛手段 protective technique であつたらう。

いうまでもなく、ユートピアはギリシア語の οὐ (not) と τόπος (place) とを組み合わせ、どこにもない nowhere²³⁾ という意味を匂わせている。また語り手ヒスロディもやはりギリシア語を合成し、nonsense を語る男²⁴⁾、うそつき、大法螺吹きの意味となる。このようにカムフラージュし、言葉の遊戯に逃れても、最初から英語で書いたとすれば、違った事態を招いたかも知れない。

こうして成立した『ユートピア』の第1巻は終始イギリスの政治への痛烈な批判である。とくに当時進行していた困い込み運動²⁵⁾に関しては「羊が人を喰う」という不朽の名言を残した。

農場から押し出され、生活手段が見出せないまま、心ならずも窃盗を働くと、有無を言わず死刑に処せられる。現在のイギリスでは考えられない厳罰主義は、いつのころ始まったかは明らかにしえないが、少なくとも18世紀までは続いており、女盗賊を主人公とした

れず、ここで『ユートピア』が書かれたことは決して偶然ではない²¹⁾。

物語は、アントワープのモアの宿舎の裏庭で、モアの友人、市の法廷書記ジャイルズの紹介で知った文化人ヒスロディの体験談として展開されていく。

『ユートピア』は周知のように第1巻イギリス篇、第2巻ユートピア篇となっているが、モアがアントワープ滞在中に書いたのは、この第2巻であって、序論・結論を含む第1巻のイギリス篇は、ロンドンに帰ってから書き上げたものである。両巻合わせた草稿をベルギーのルーヴェン（ブリュッセルの東方）にいたエラスムスに送り、エラスムスの尽力で出版の運びとなった。当時エラスムスは、ルーヴェンを活動の拠点とし、その後4年間もここに住み、出版業者とも接触があったからである。

『ユートピア』は、ひろくヨーロ

デフォーの小説『モル＝フランダース』²⁶⁾を読んで啞然とするのは、物を盗んだだけで死刑になるという戦慄すべき事実である。モアが『ユートピア』のなかで声をからして訴えたことは、その後2世紀にわたって改められず、イギリスでは『ユートピア』は馬耳東風に終わったことになるが、かえって世界の他の国々において、モアの主張の共感者がぞくぞく現われ、前述のようにはなばなしいユートピア運動が展開されてきた。

さて『ユートピア』の最大眼目、第2巻所載のユートピア国とはどんな国であろうか。モアは、庶民にも親しみのある地理語を用いその風土の描写から筆を起こしているのは興味深い。もちろん、モアの頭にこびりついているのは故国イギリスの地理的状况であり、政治組織など重要部分のをぞいては、ユートピア国の地理は、イギリスの地理の反覆 repeat である。ユートピア国の州都の数²⁷⁾もイギリスと同様であるし、首都アモロート（モアの造語で、暗い都市の意）の叙述はロンドンを彷彿させるものがある。ユートピア国は現在は島であるが、かつては大陸の半島部をなし、運河の構築によって地形が改変された。これは島民が毎日6時間の労働に従事した結果であってユートピアにおいても労働は重視されるべきことをモアは示唆している。ユートピアのおもな産業は農業であると記しているのも、当時のイギリスの産業構造そっくりであるが、都市と農村との間で、毎年それぞれの半数が交流し、都市の過密化と農村の過疎化を回避しようとしていることは、現代の都市問題に1つのヒントをささやいている。

ユートピア国のイメージは、多くの点でイギリスを想起させるが、肝心の地理的位置については no comment である。『ユートピア』の付録である「モアからジャイルズへの手紙」のなかで、ユートピアの所在については「私たちが彼に訊ねたという覚えはありませんし、彼も私たちに話したことはないと思いますが問題は新しい世界のどの辺にユートピアがあるかということなのです。」²⁸⁾と記し、モアは故意にその所在を曖昧にしている。当時赤道以南の南米と同意語であった新世界のどこかにあることをほのめかしながら、具体的にはなにひとつそのヒントを与えない。どこにあるか分らない。結局どこにもないという設定があればこそ、モアは辛辣な筆致で国家・社会のあるべき姿を敢然と表白しえたのである。そして『ユートピア』の核心ともいえる重要な発言はヴェスプッチの航海記から示唆をえて記された。そこで、『ユートピア』とかかわりをもつ範囲内でヴェスプッチの航海と大航海時代の地理学の状態をさぐってみたい。

3. 大航海時代の地理学

大航海時代とは、従来、地理的発見時代 The Age of Great Discoveries と呼ばれた時代に対応するわが国固有の名称である。ヨーロッパ人は新世界を発見したというが、現に推定数150万を超えるインディオたちが15世紀末、南・北両アメリカにひろく分布していたのであるから、global な立場から発見というのは僭越である。地理学者故飯塚浩二氏らの熱心な提唱²⁹⁾で、わが国では大航海時代という名称がしだいに学界・教育界にも浸透し、かなりの普及をみている。しかし、この時代の上・下限についてはまだ定説はない。狭義では1492年のコロンブスによる西インド諸島への上陸に始まり、1522年のマゼランの船隊の世界周航の完成に終る30年間をさす場合が多い。

ともあれ、大洋を横断し、ヨーロッパ人としては、前人未踏の島々や陸地に上陸を開始した大航海時代の到来は、ヨーロッパ各国に恐らく有史以来と思われる大きい感動をもたらした。1498年ガマのカリカット上陸の報がガマの母国ポルトガルに達したとき、首都リスボンでは国王マヌエルはじめ人々が相擁し、欣喜雀躍したと伝えられる³⁰⁾。

しかし、新世界の陸地と住民との消息が、風の便りにしか達しなかった15世紀中は、まだヨーロッパは平静であった。たとえば、中世からすでに開始されていた地図製作事業も16世紀を迎えるまで比較的閑散で、手持無沙汰であった。しかし次々と新世界のニュースがヨーロッパに届きはじめると、それを地図上に表現し、新世界に関し鶴の目鷹の目になっていたヨーロッパ人の熱望にこたえようとする動きが俄然活発となった。著名な地図家が輩出し始めるのもこの時期であった。そしてこのころ、地図学者・地図家の間に、はなはだしく脚光をあびて登場したのは、コロンブスでもなく、ガマ³¹⁾でもなく、カボットでもなく、イタリア人航海者アメリゴ＝ヴェスプッチ Amerigo Vesppuchi (1454—1512)であった。

アメリゴはフィレンツェの公証人の家に生れ、メディチ家に仕えた。才気をもとめられ、メディチ家の経営する銀行の要職に就く。1491年スペインのセヴィリアに派遣され、貿易事務を担当し、93年第一次航海から帰国したコロンブスとも接触があったと考えられる。97年ごろから、かれの問題の航海が始まり、1504年にスペインに帰ると、新世界探検の最功労者として遇されるようになった。すでに帰化してスペイン国籍になっていたが、スペイン宮廷の海事顧問、さらに1508年にはセヴィリアのインド貿易庁 Casa de la Contración de las Indias の初代長官 Pilot Major となり、スペインのいっさいの貿易事務を掌握した。次々と刊行される地図・海図の監察官³²⁾を兼ね、その名声は大航海に関心をもつ近隣諸国まで達していた。そのみでなく、かれは新世界に関する何通もの手紙を書き、これが印刷されて全ヨーロッパに流布し、新世界ブームを惹起するという予想外の事実で発展した。かれの航海記の特色は従来の航海記録の無味乾燥さと打って変わり、読者に喜びの念 sense of delight を与え、おもしろく読ませる点で画期的であったと、イギリスの碩学 G. R. クローンも高く評価³³⁾している。

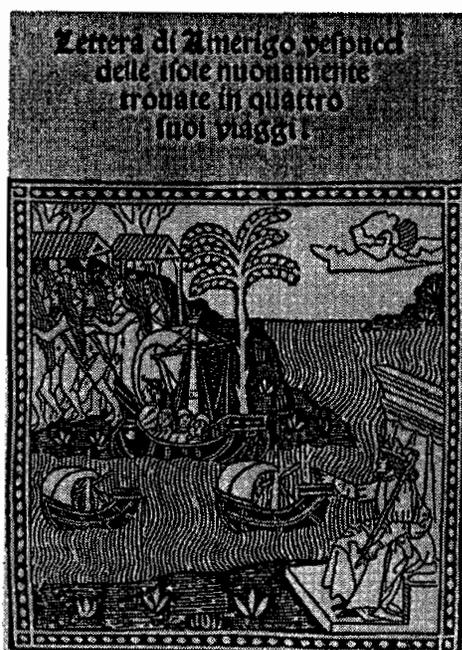
その信憑性について、いろいろ問題のあるアメリゴの航海記であるが、これには少くとも3つの系統 series があり、その間に大きな齟齬があるので、果してかれは何回大航海に就航したか、判断に苦しむ。極端な場合は一度も航海に出かけなかったのではないかという論もある。

アメリゴの航海記の異同については、岩波書店『大航海時代叢書』I巻、アメリゴの項で増田義郎氏が要を得た解説をされており、ほとんど間然するところはないが、1、2異説も参照しながら、アメリゴの航海記ならびにこれを全ヨーロッパに紹介の労をとったドイツ人マルティン＝ヴァルドゼーミュラー M. Waldseemüller (1470—1520) の業績について述べる。

アメリゴの航海記のうち最も早く公刊されたのは、1503年パリとフィレンツェで出た『新世界』Mundus Novus と題するパンフレットであった。これを地理学者リングマンが入手し、時を移さず1504年サン・ディエから出版した³⁴⁾。

航海記の第2の系統は1505年初版の『アメリゴの4回の航海』と称するもので、前年の9月リスボンからフィレンツェ市長 (gonfaloniere) ピエロ＝ソンドリニ宛に送ったアメリゴの書簡の形をとっている。1507年これら2系統の航海記は早くもイタリア語・フランス語・ドイツ語など十数種類の小冊子として出版され³⁵⁾、いずれも廉価版であったため飛ぶように売れた。モアも『ユートピア』のなかで「この航海記は今では印刷になって誰でも容易に入手できます³⁶⁾」と記している。

しかし内容的にモアが参考にしたのは『新世界』の方であり、『4回の航海』はヒスロディがこれらすべての航海に参加したことと、第4回目の航海で、アメリゴが24名の船員



第3図 ヴェスプッチ「4回の航海」表紙(1507年)

を現地に残留させたという記事を書くためにだけ用いたとあってよい。つまりモアは『新世界』と『4回の航海』両方³⁷⁾を見ていたわけで、当時の知識人としては当然のことである。

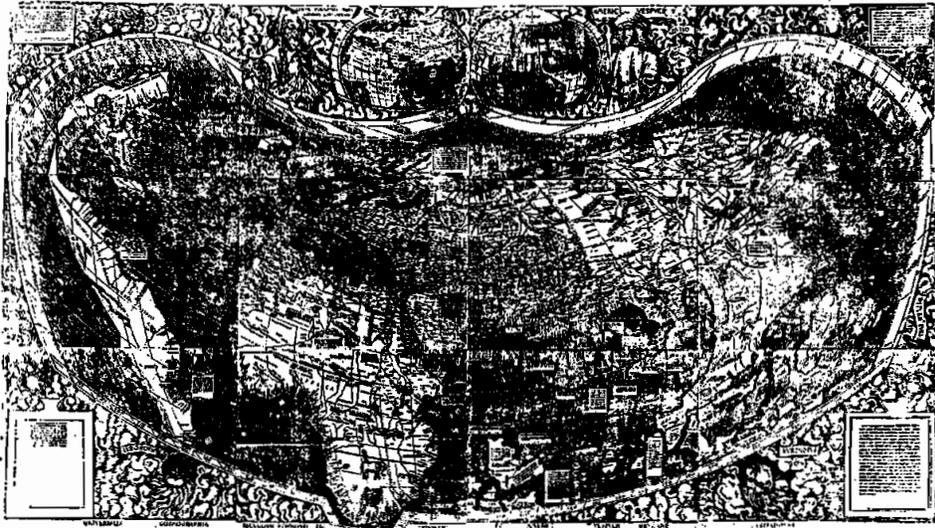
第3の系統の書簡は、18世紀以後発見されたメディチ家のロレンツォ宛のメリゴの3通の私信(1.1500年, 2.3.1502年)であって、2.3.は印刷になっているが、邦訳はない³⁸⁾。この私信によると、第1回目の航海ではメリゴ自身、上陸した地点が新世界であることを知らず、プトレマイオスの地図³⁹⁾にあるアジアの東端カッチガラ⁴⁰⁾ Kattigara の市場と誤認し、カッチガラ岬と名付けたとある。そのことからメリゴの関心は一度はアジアに傾き、みずからの目でガンジス河口やタプロバネ(セイロン島)を確認したく、スペイン王室に願い出たが許可をとれず、アジアへの航海は断念した⁴¹⁾。

そして今度はポルトガルの援助で、1501年5月リスボンを出帆、決定的な新世界発見の旅になる大航海が開始された。この航海では、南米東岸を南緯50度まで南進、現在のパタゴニア付近まで達している。このような先人未踏の大航海がヨーロッパ人の血をたぎらせたことはいうまでもない。

しかも晩年は不遇をかこったコロンブスと異なり、凱旋將軍のごとく迎えられ、航海者の亀鑑のような位置を占め、その高名を背景としてメリゴの航海記はいわゆる爆発的な売れ行きを示したことであろう。

フランスの東方ヴォージュ山中の小さな町サン・ディエ St. Die は、当時英明の聞えが高く、とくに地理学に理解のあったロレーヌ侯ルネ2世の居所であったため、16世紀初頭には、地理学者・地図家がここに移り住み、宛然地図学のメッカの感があった。当時まだ30歳代の弱冠ながら、同市のギムナジウムの地図の講師をつとめていたヴァルドゼーミュラーは、ルネ2世の後援で、地理学の古典プトレマイオスを上梓すべく意欲を燃やしていたが、たまたまメリゴの「4回の航海」を入手し、メリゴこそ新世界の発見者であると確信するようになった。メリゴのこの航海記を reprint し、かれ自身編集した小冊子『世界地誌入門』Cosmographiae Introductio の付録として世に送った。そしてこの小冊子によってメリゴの航海記は一躍有名になり⁴²⁾、人気を博した。

この小冊子と並行して、1507年ヴァルドゼーミュラーは、重要性においても、また外形(大型)の上においても、画期的といわれる世界地図 Universalis Cosmographia を製作出版した。旧世界の大部分はプトレマイオスの地図を襲用しているが、新世界の部分は、Caveri の海図(現存)などを参照し、しかも芋虫のようにやせ細った南米の南の内陸部分に、メリゴを記念した AMERIKA という地名を注記した。もちろん、これがアメリカという文字の記された世界最初の地図である。



第4図 ヴァルドゼーミュラーの世界地図 (1507) A Book of Old Maps に拠る

この地図は1片 38×53cm の木片で印刷した木版図を12枚つぎ合わせ、面積 2.34m² に及ぶ大型地図⁴³⁾で、当時の機械・技術をもってすれば、集約的に作業をつづけても、1千枚刷るのが精一杯だったといわれる。こうして苦労を重ねた地図も何世紀かを経るうち、図幅の全部が散逸し、1901年になって、西ドイツ、Württemberg の Wolfegg の古城でやっとその唯一の「生き残り」が発見され、1903年発見者 J. Fischer と Wieser により full-size の複製版が刊行された⁴⁴⁾。

もともと大型地図であるから、これを縮小するとその細部はほとんど判読できない。地図学史の standard work と呼ばれる Bagrow-Skelton の Meister der Kartographie (S. 372), Skelton の History of Cartography (Plate LXI) 岩波『大航海時代叢書』I (p. 322), 同『プトレマイオス世界図』解説 (p. 2) いずれをみても、細部は不明であるが、1925年 Harvard 大学から出版された『古地図の本』には、比較的大きくこれが収録され、南米の Patagonia 地方にはっきり AMERIKA という文字が読みとれる⁴⁵⁾。

ヴァルドゼーミュラーは、地球の第4番目の陸地は、Americus が発見したのであるから、アメリゴの国 Amerige, Americ's land と呼ぶべきであるが、ASIA も EUROPA も女性の名前をとって大陸名としたから、ここも AMERIKA と呼びたいというあらずもがな珍説を『世界地誌入門』で述べている。当時のヴァルドゼーミュラーはこのようにアメリゴ一辺倒で、地図の上部に旧世界新世界の小さな両半球図を描き、旧世界の左方にプトレマイオス、右方新世界の右側にアメリゴの肖像をそれぞれ配置している。しかししばらくのち、新世界の真の発見者はコロンブスであり、アメリゴでないことを認知して、図上からアメリカの名称を抹殺したといわれる⁴⁶⁾。

ヴァルドゼーミュラーはアメリカの生みの親、godfather⁴⁷⁾ ともいうべきアメリゴを高く評価したが、実際の発見者であるコロンブスの功績をアメリゴが奪い取ったのではないかという非難はどの時代にもある。わが国でも、1847 (弘化4) 年に出た箕作省吾の地理書『坤輿図識』がこのことにふれ、アメリカ大陸は発見者コロンブスの名前をとって、コ



第5図 ヴァルドゼーミュラー「世界地図」に描かれたヴェスプッチの像

ロンプス洲（閩竜州）⁴⁸⁾と呼ぶべきだとする。

『坤輿図識』より45年後、コロンブスのアメリカ発見400年を記念して出版された内村鑑三の『コロンブスと彼の功績』（1892）⁴⁹⁾では、ヴェスプッチ、カボット、バルボアなどはコロンブスの後塵を拝したとするだけで、ことさらにアメリゴを陥れる発言はない。なお同じ書物で内村はモアの『ユートピア』に言及し、自由ということばと同意義の米国において、ユートピアやニューアトランティスは「実成せられつつあり」⁵⁰⁾と記している。後年の内村のアメリカ嫌いは有名であるが、当時はアメリカ留学から帰ったばかりで、アメリカへの郷愁にひたっていたためであろう。

飯塚浩二氏は「西航ルートの開発に先鞭をつけたのがコロンブスなら、地理学の領域でイドラ（フランシス＝ベーコンのいう幻影、偶像）からの解放に先鞭をつけたのがアメリゴであった」⁵¹⁾と言い、ながくヨーロッパ人を欺いていたプトレマイオス的世界の虚像を打破し、新世界の厳存をたしかめたヴェスプッチを温かく弁護している。

4. ユートピアとヴェスプッチ航海記

モアがヴェスプッチの航海記から何を学び、それが『ユートピア』の記述にどのようにつながったかを最後に考えてみよう。ヴェスプッチが巧みに描写した新世界の住民の風習に奇異の念を感じたのは、ひとりモアだけに限らなかつたであろうが、ホメロスの『オデュッセイア』はじめ、ギリシアの古典で知り抜いている人食巨人・六頭女怪など怪物めいた存在、ヴェスプッチがまことしやかに述べている新世界住民の奔放な性生活や食人慣行などの記事についてはモアは見向きもしなかつた。ヴェスプッチの航海記のうち、最も強くモアの心を打ったのは「かれらは毛織物も亜麻布も綿織物も、いっさい必要ないので持っておりません。また私有の財産というものがなく、すべてが共有になっています。かれらには国王も官憲もなく、各人がみずからあるじです」⁵²⁾ということばであったろう。こういう章句に遭遇し、ヨーロッパ切つての人文学者モアもしばしば沈思黙考せざるを得なかつたであろう。明瞭な形での社会主義、資本主義は当時まだヨーロッパには見られな

ったが、各国とも戦争による領土拡大に狂奔し、大航海時代の新しい発見地を宣教の名をかりて搾取の対象としようという野望は歴然たるものがあった。このような環境のもとで、アメリゴの記述は、モアにとり天からの啓示のように感じられたに違いない。

敬虔なカトリック信者として、該博な聖書知識をもち、また深くギリシアの古典に沈湎したモアにとっても、このように平明で、しかも胸を突き刺すようなことばはかつて聞いたことがなかったであろう。しかも、一面では恥ずべき蛮行に終始しながら、新大陸の住民はなぜこのように理性的なのであろうか。また他の箇所には、「金はじつに豊富であるけれども、かれらの間では金はすこしも尊重されず価値がない」⁵³⁾とあり、価値観の逆転の諸相が記されている。

このようなアメリゴのことばを考え抜いた末、モアが『ユートピア』の結論として記したのは「私は思うまま、率直に申上げるのですが、財産の私有が認められ、金銭が絶大な権力をふるう所では、国家の正しい政治と繁栄とは望むべくもありません」⁵⁴⁾「ですから、私はユートピアの、つまり、すくない法律で万事がうまく円滑に運んでいる、したがって徳というものが非常に重んじられている国、しかもすべてのものが共有であるから、あらゆる人が皆、あらゆる物を豊富にもっている国、かようなユートピアの人々の間に行われているいろうんなすぐれた法令のことを深く考えさせられるのです」⁵⁵⁾などのことばである。これらの文章が第1巻の末尾部分に見出されるのは、上述のように、第1巻の方が第2巻よりあとに書かれ、全体の結語として受けとれるのである。

こんなにもあからさまに書くべきか、書かざるべきか、おそらくモアは最後の最後まで迷い抜いたことであろう。しかしこれを書かなければ、せっかくアメリゴの航海記を引き合いに出したことが無意味になる。敢然と財産の共有制を筆にしたものの、その前後にプラトンの『共和国』のことばをもち出し、あたかもプラトンが言ったかのような印象を与える。巧妙なカムフラージュである。しかしすでに賽は投げられたというべきである。

モアの『ユートピア』を不朽ならしめたのは、こういう章句を頂点とした一連の政治批判ではなかったであろうか。そしてそのうち最も重要な発言が、アメリゴの航海記を源泉としたことは、上記の引用文から明らかであろう。

む す び

以上、簡単ではあったが、『ユートピア』とアメリゴ＝ヴェスプッチの航海記との関係を述べてきた。

トマス＝モアの生きた時代は、まさしく大航海時代と符節を合し、少くともモアの20代30代という人間としての最盛期は、大航海時代のなかでもコロンブス・ヴェスプッチ・マゼランが世界の大洋に雄飛した文字どおりの絶頂期であった。他の学問とならんで地理学に大きい関心を示したモアが、大航海時代の動向に鋭敏な反応を示したことは当然と言える。

もともと東方の「楽土」、西方の「幸運の島」など地上楽園探究⁵⁶⁾のためにその幕が切って落された大航海時代は、モアだけでなく多くのヨーロッパ人に想像のつばさを与え、自由な思想の世界に羽ばたかせた。『ユートピア』より1世紀おくれて世に出たシェイクスピアの『あらし』The Tempest (1611) は、題名そのものが、大航海時代のはげしい息吹きを感じさせるがその文中でもシェイクスピアは老いた人文学者ゴンザーローの口をとおして、「叛逆もなく、強盗もなく、剣、槍、短刀、銃砲、その他いくさ道具の必要もなく、天然が当然おのずから、豊饒の五穀を生じてわたくしの純朴な民草を養ってくれま

す」「陛下よ、わたくしは完全無欠な政治を行ないます」「富や貧乏や奉公ということもいっさい認めず、境界、領分、耕地もなく、君主権というものもなく」⁵⁷⁾ など大航海時代以前では思いもよらなかった自由奔放なことを披瀝している。大航海時代は政治・経済・文化ばかりでなく、地理・科学・思想の自由な発達に及ぼした影響には計りがたいものがあり、はしなくもアメリゴ＝ヴェスプッチの航海記を媒介としてこの時代の最大の成果ともいうべきトマス＝モアの『ユートピア』が生み出された。

大航海時代より約1世紀おくれて、地理学的な関心が大西洋から当時大南洋 the Great South Sea と呼ばれた太平洋に移ったとき、フランシス＝ベーコンの『ニューアトランティス』が現れている⁵⁸⁾。当時はオランダ人が大南洋に雄飛し、オーストラリアを発見したところで、『ニューアトランティス』はまさしく大南洋航海時代の産物であった。この書物の主人公はペルーを出発し、中国・日本を目指して架空の航海をつづけるうち、5カ月後に大暴風雨に出合い、人跡未踏の南海の島、ニューアトランティスに打ちあげられるという設定である。

これよりさらに1世紀おそい17世紀の終りごろ、イギリスの海商ウィリアム＝ダンピエやウッツ＝ロジャースなどの大航海によってふたたび太平洋が脚光をあび、太平洋航海時代が到来した。この時期に出た『ロビンソン＝クルーソーの冒険』や『ガリヴァー旅行記』はまさに太平洋航海時代の産物といえるが、それと同じ意味で、モアの不朽の名著、前の3つの架空物語よりも数倍大きい思想的意義をもつモアの『ユートピア』もまた大航海時代の1つの産物、それも最も価値ある産物 product と考えたいのである。

さらに『ユートピア』のあと、イギリスでは新世界における植民地建設計画が起こり、政府への免許嘆願運動が相ついで。その嘆願者の1人、イングランド教会の重鎮ハックルート Richard Hakluyt は、イギリスの過密人口と失業者救済には新大陸移住以外の救済策はないとエリザベス女王に進言した。「イギリス人という1つの国民は、大西洋の(東西)両岸を活動舞台としなければならない」ことを説いた「西方への植民」という論文⁵⁹⁾は女王の目にとまり、個人の資格でこれを読んだというが、すぐにはその実行を許さなかった。ハックルートはこの嘆願と併行して、イギリス人のあらゆる航海記録の蒐集に乗り出し、将来の植民活動に備えた。イギリス地理学の Bible ともいうべきハックルートの航海記録集⁶⁰⁾がもし『ユートピア』から靈感⁶¹⁾を得て実現したとすれば、モアの業績は大航海時代の産物であると同時に、地理学とも深いかわりがあったというべきである。

注

1. 詳しくは De Optimo Reipublicae Statu deque Nova Insula Utopia. わが国では1882(明治15)年に早くも『新政府談』(井上勤訳)の題名で翻訳され、以後少くも20種類の邦訳が出ている。
2. ユートピア建設運動は世界各地にみられるが、アメリカ合衆国ではとくに盛んであり、1870年以後今日まで数十の communities がつくられ、最近写真入りの報告書 P. Kagan, New World Utopia, 1975 が出ている。わが国では武者小路実篤氏の「新しい村」がその1つであり、奈良県橿原町の心境部落もユートピアの末流である。
3. たとえば、J.O. Hertzler, The History of Utopian Thought, 1922. かれはアモス・ホゼア・イザヤ・エレミア・エゼキエルなどユダヤの予言者をユートピア思想の先駆者として捉えている。
4. たとえば、田村秀夫『イギリス・ユートピアの原型』, 1968, 田村秀夫編『トマス・モア研究』, 1978, 沢田昭夫・田村秀夫・P. ミルワード編『トマス・モアとその時代』, 1978, なお未見ではあるが、伊達功『近代社会思想の源流』, 1973, のなかに、「ヴェスプッチの航海記とユートピア」と

いう一文がある。

5. J.N.L. Baker, *Mythical lands in History*, in *The History of Geography*, 1963, p. 179.
6. 従来の定説は1478—1535年であったが、最近の研究では1477年説が有力となっている。イギリスでは77年～78年をかけ、モアの生誕500年記念行事が催された。
7. わが国ではモアよりエラスムスの方がよく知られている。1600年わが国に漂着した最初のオランダ船はエラスムス号またはルーフデ（自由）号と呼ばれ、その船首にかれの木彫が置かれていた。この彫像は貨狄尊者像の名で東京国立博物館に蔵されている。
8. 家庭的にもよき夫、よき父であったことは、画家ホルバインの描いた「モア家の人々」にもうかがわれる。イギリス人らしく *joke* を好み、エラスムスはモアを評して生まれながらの *humorist*, *joke* の天才であったと言う。
9. モアは結局カトリックに忠実であろうとして死を招いた。一種の殉教者であり、のちにローマ教皇から聖者 *Saint* の称号をおくられた。
10. 植村雅彦「イギリス国教の定着」、岩波講座『世界歴史』14巻, 1969, p. 420.
11. 原名は *Eloge de la Folie*, 渡辺一夫氏の名訳（岩波文庫版, 1954）がある。同書にはモア伝研究にも有益なエラスムス略年譜がついている。なお『世界の名著』17, エラスムス・モア編の解説, 渡辺一夫「ルネサンスの2つの巨星」参照。しかしこの書物の邦訳が出たのは第二次大戦後である。オランダの史家ホイジンガも『エラスムス伝』を書いている。
12. R.A. Skelton, *Maps, A Historical Survey of their Study and Collecting*, 1972, p. 42.
13. E.G.R. Taylor, *Tudor Geography 1485-1583*. 1968, p. 7 モアの結成した *intellectual circle* は1830年代の日本で渡辺華山をリーダーとして組織された尚歯会とよく似た性格をもっている。尚歯会は蘭学の研究を主要目的としながら、実は外敵来るといふ危機感から世界地理の研究に出精した。しかし、結局、これが命取りになって蚕社の変となった。尚歯会におけるエラスムス的存在は、さしあたり、高野長英であったろう。
14. Cape Frio はヴェスプッチの第4回航海で24名が残留した地点、モアのラテン語原文では *Castello*（城、要塞）となっているが、英訳の際 *Gulike* という固有名詞に誤って転化した。
15. 昌険商人は中世以来衣類・羊毛の輸出によって産をなし、商業資本を蓄積して17世紀には東インド会社と対立する位置を占めた。G.M. Trevelyan, *English Social History*, 1942, p. 215.
16. 平井正穂訳『ユートピア』（岩波文庫版）, 1957, p. 11
17. 辻田右左男「ダニエル＝デフォーと地理学」、人文地理26巻5号, 1974.
18. Taylor, *Ibid.*, p. 8. Taylor は *Rastell* をモアの養子 *son-in-law* としているが、実はモアの妹エリザベスの夫、ニューファウンドランドを探検、モアはその保証人となった。
19. John Rastell, *New Interlude of the Nature of the Four Elements*, 1519? きわめてドラマティックに当時の世界を描写し、イギリスの著者による近代地理学の最初の書物であると Taylor は激賞している。わが国の明治維新後、福沢諭吉が七五調のことで「世界国尽」を書いたように、この書物も詩でつづられ、「地球には北の部分と、南の部分がある。大きさは同じだが、南についてはだれも、なにも知らない」などの句がある。かれは新世界と旧世界を峻別した。
20. 「もしモアがイタリアでその知力をみがくことができたなら、モアの天賦の才能はどこまでのびたか知れない」とエラスムスはモアがイタリアへ行かなかったことを惜んでいる。「エラスムスからフローベンへの手紙」、Lupton, 次掲書、序文 p. 178.
21. 越智武臣、「ヨーロッパ経済の変動」、岩波講座『世界歴史』14巻, p. 121.
22. J.H. Lupton, *The Utopia of Sir Thomas More*, 1895. モアのラテン語原文とロビンソンの英語訳を同頁にのせ詳しい注がついている。モア研究の *the standard critical edition* とされ、筆者もこの書を用いた。なお1978年刊 沢田昭夫訳『ユートピア』（中央文庫）もラテン語から訳され、30頁に及ぶ訳注は圧巻である。ユートピアの地図も1516年、1518年版2つをのせている。
23. William Morris は1890年、*News From Nowhere* を書き、『ユートピアだより』（松村達雄訳、岩波文庫版）と訳されている。かつて『無可有郷通信』（村山勇三訳、春秋文庫、1933）の訳

- もあった。
24. P. Turner, Thomas More's, Utopia (Penguin classics), 1965, p. 10
 25. 大塚久雄氏はその『近代歐洲經濟史序説』のなかで2頁にわたりモアのこの箇所を引用している。困い込み運動（綜画運動）の嵐に吹きまわられた「農民の流離」 rural exodus については、史家トレヴェリアンはモアのことばを引用し「40人の農民が生活を支えた場所が（困い込みにより）いまは1人の人間とその羊飼いが占拠している」という当時の実情を述べている。G. M. Trevelyan, English Social History (a Pelican Book), 1942, p. 132
 26. D. Defoe, Moll Flanders, 1722. 伊沢龍雄訳（岩波文庫, 1968）がある。
 27. モアはユートピア国には54の大きく、壮麗な州都 shire town があつたと記したが、かれの時代の City は州 county そのものであつた。Lupton, Ibid. Turner はモアの州都を garden city と訳している。現在はイングランド46州、ウェールズは8州となっている。
 28. 平井正穂訳『ユートピア』, p. 187.
 29. 飯塚浩二「大航海の時代」岩波『大航海時代叢書』別巻, 1970, p. 7 以下。
 30. 王はガマを記念して壮麗なベレムの教会を建てた。C.D. Ley (ed.), Portuguese Voyages, 1947, p. 3. 1974年筆者はこの教会を訪れた。
 31. ガマの大航海を綴った詩人カモンイスの詩篇「ウズ・ルジアダス」は1978年邦訳が出た。
 32. N.J.W. Thrower, Maps & Man, 1972, p. 51. なお3代目の Pilot Major はラブラドルを発見した John Cabot であつた。
 33. G. R. Crone, Background to Geography, 1964, p. 28
 34. R. A. Skelton (ed), History of Cartography, 1964, p. 126.
 35. Elsevier, Landmarks of Map Making, 1968, p. 198.
 36. 平井訳, 前掲, p. 11.
 37. 前掲, 『大航海時代叢書』I に長南実訳（両方とも）がある。p. 249 以下。
 38. 増田義郎, 「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」解説, 同上書, p. 254.
 39. 岩波『プトレマイオス世界図』, 1978, 本図付録の L. パガーニ, 竹内啓一訳の解説と増田義郎「大航海時代とプトレマイオス」はこの種文献の白眉であろう。
 40. 同上, 織田武雄・高橋正・船越昭生「世界図の解説」(p. 18) によると, カッティガラは, 現在のサイゴンかユエ, あるいはハノイか広東付近などの各地点に比定されるという。
 41. 山中謙二『地理発見時代史』, 1969によれば, ヴェスプッチの第4回の航海の目的は大西洋經由インドに向うことであつたとある。同書, p. 161, 山中氏は類書のうち, 比較的多くのページを割いて, ヴェスプッチのことを記しているが, 他の資料との調整が困難である。
 42. G. R. Crone, Maps and their Makers, 1968 (4th ed.), p. 72. ヴァルドゼーミュラーはこの書物の序文で「多くの土地を訪ねもつともかけはなれた民族を見ることは人生において楽しみであるだけでなく有益である」と述べている。
 43. D. Woodward, Five Centuries of Map Printing, 1975, p. 7
 44. R.V. Tooley, Maps and Map-makers, 1972 (5th ed.), p. 111.
 45. E.D. Fite and A. Freeman (ed.), A Book of Old Maps, 1925.
 46. 飯塚浩二, 前掲「大航海の時代」, p. 52 16世紀初頭から中葉に至る時期, ヨーロッパで刊行された世界地図上の南・北米の地形（輪郭）の変化と地名の移動には興味深いものがある。アメリカの名称を固定させたのは, 例のメルカトルの世界地図である。A. E. Nordenskiöld, Facsimile-Atlas, 1973, 参照。
 47. Tooley, Ibid, p. 26.
 48. 辻田右左男, 箕作省吾『坤輿図識』奈良大学紀要, 2号, 1973, p. 54.
 49. 内村鑑三「コロンブスと彼の功績」, 『内村鑑三全集』第1巻, p. 512.
 50. 内村, 同上書, p. 515-516.
 51. 飯塚, 前掲「大航海の時代」p. 53

52. 長南実訳「新世界」前掲, p. 329.
53. 同上, p. 332.
54. 平井訳, 『ユートピア』, p. 61.
55. 同上, p. 62.
56. 川端香里男『ユートピアの幻想』, 1971, p. 74
57. 豊田実訳『あらし』(岩波文庫版), p. 72-73.
58. Baker, *Ibid.*, p. 182.
59. E.W. Gilbert, Richard Hakluyt and His Oxford Predecessors, in *British Pioneers in Geography*, 1972, p. 40.
60. Hakluyt, *Voyages and Documents*, 8 vols. Everyman's Library, 1965. Hakluyt を記念して, 1846年設立されたハックルルト協会はすでに百数十種類の旅行記・航海記を刊行した.
61. ゼー=ホランド=ローズ著, 神近市子訳『船と航海の歴史』, 1943, p. 131.

付記 1978年まるひと夏を費して以上のようにまとめてみたが, まだ未定稿の域を出ない。目的とする港の姿が見えかけたかと思うと, たちまち波や風が起って, 船は沖合に追いやられ, さながら果てしなき航海の感がある。小手先3寸では到底片付かない難問題も多く, 読者諸賢の御示教を待ちたい。

Summary

The author of this paper has had wondered long time how there might be some relationship between the so-called utopia or paradise of various people and the geographical conditions of the lands where they live. But it is beyond my power to discuss all instances of such an uopian thought. The author only considered in this paper Sir Thomas More's 'Utopia' and its geographical background. Firstly he studied the brilliant and tragic lives of More and his intimate friend D. Erasmus. Secondly he examined the motive and structure of 'Utopia' which appeared in 1516. And he found Amerigo Vespucci's influence was very large upon More's work as the book itself related. Vespucci, though not so popular as Columbus to the Japanese intellectual society, had put his several voyages to the New World on record. Surely they contained some unauthentic documents, but through the efforts of Martin Waldseemüller, the German geographer, his letters became popular among the European nations. The author inspected the geography and cartography of the Age of Great Discoveries, which is now known among us by the name of the Age of Great Voyages. For we think the latter is the proper name because when Columbus arrived the neighbouring islands of America, there lived at least one million Indios in North and South America. But main aim of this paper is not protests to the name of Great Discoveries, rather the comparison of the words in the letters of Amerigo's and in the 'Utopia'. Naturally More quoted much sentences from the former, at least he had found the hints in the institution of the Utopian Island, having no Lord but necessary properties in common, and regarding gold as unworthy. Thus the author concluded that More's work was the product of the Age of Great Voyages.